
神の使徒と魔女と...

氷雪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神の使徒と魔女と…

【Nコード】

N1214F

【作者名】

氷雪

【あらすじ】

ある日、黒の教団にアレンと共にやって来た三人の「魔女」と、同日に千年伯爵の元を訪れた一人の「魔女」…。同じ道を歩めず、まともに話しかける事さえも出来ない辛い戦いの幕が、今開かれる…。

第一章（前書き）

この小説はD・Gray-manの二字創作小説です。

二字創作が苦手な方、またはネタバレが嫌な方、キャラ壊れが嫌な方は読むのを控え下さい；；

かなり壊れてしまう可能性大ですので…

原作沿いにしたいと思ってます。

第一章

「皆、貴方達が生まれた場所…。【生誕の礎】へ漸く集まったようですね…」

一人の女。

否、女神が小さくそう零した。

その場に居るのは女神を除いて僅か四名の少女。

彼女達は女神が放った言葉の一つ一つを名残惜しそうに聞き取っていた。

すると束の間の静寂の後、赤髪の少女：セルシオが女神に憂いを帯びた眼差しを差し向ける。

女神はそれに答えるように小さく頷くと重たい口を開いた。

「…白雪は終焉へ。火焰、樹鈴、漣は神へ……宜しいですか？」

女神がそう告げると、

四人の少女達は三人と一人に別れ正反対の方向へと歩を進めていった。

向かう先は漆黒の扉と純白の扉。

三人は光へ

一人は闇へ。

各々の歩むべく道を、心なしか寂しそうに歩んでいった

すると一人、暗闇へと進んで行く銀髪の少女が後ろを振り向かずに静かにこう零した。

「さようなら、旧友達…」

第二章（前書き）

この章には、『D・Gray-man』の第五夜に沿った内容が含まれます。

ネタバレ、二字創作、キャラ壊れなどが嫌いな方は閲覧をお控え下さい……

第二章

「はあ…はあっ…」

所変わって、現在【黒の教団】へと続く崖を現在進行形で登り、それも「この手離れたら死ぬんじゃない？」的な危機的状況に措かれている少年、アレン・ウォーカー。

だが、彼が頂上まで後少しの所で唐突に動きを止めた。

何やら口を開いて驚愕の表情を表しフリーズするアレン。

そう、その理由は

…

「いやー…、黒の教団だっけ？ 何もこーんなトコに造んなくっても良いのに」

「だよね〜。ぜ〜ったい此処に来る人大変だよ〜」

「ってか、態々上る奴居んの？」

「あ、それ言えてる」

『普通に』会話しながら

『ナチュラルに』ぐんぐんと伸びていく蔓の葉に乗り

『平然とした』笑顔で

自分が必死こいて登ってきた崖をエスカレーター式で上って行く三人の少女を目撃してしまったから。

（え？ 僕の今までの苦労は？

今までの汗と涙の結晶は？）

当然放心状態のアレン。

すると、アレンの真横に来て初めて三人の内の一人在彼の存在に気付いたらしく思いつ切り目を見開いた。

「頑張つて上つてる奴居たああああ！！！」

「えっ、うわああああ！！！」

突然大声を出されて思いつ切り驚いた……

否、ビビツたアレン。

しかも不幸な事に、驚いたショックで岩から手を離してしまったため忽ちバランスを崩して下へと落下してしまい、近くでアレンに同行していたティムキャンピーが突然の事に唯でさえデカイ口を更に大きく開けていた。

「ねえフォリン。あの子落ちちゃったよ？」

「だね、でもこの高さだからまだ地面に【グシャ】ってなるまでには時間がある」

「フォリン、助ける」

「はいはい……」

フォリンと呼ばれた緑髪の少女が渋々頷くと右手の人差し指を上へと翳した

「青覆輪」

そう少女が小さく呟くと下の方から（ズシン）と何かが激しくぶつかり合う音が聞こえた。

すると暫く経った後、少女達が乗っている蔓を伝うようにして現れた一枚の大きな葉と

そこに乗っている白髪の少年、アレンが何が起こっているのか分からない、と言った表情で葉の上から下の景色をキョロキョロと見渡していた。

「いやー、悪かった悪かった！」

アレンが漸く彼女たちの居る葉の近くまでやってくると
先程フォリンに殺気混じりの命令を下していた赤髪の少女が、口先
では謝っているものの全く悪びれていない様子で手をひらひらと振
りながら暢気に笑っていた。

しかし、暢気に笑っている赤髪の少女とは正反対に、頬を膨らませ、
何やら神妙な面持ちでアレンを見つめていた青髪の少女が徐に口を
開いた。

「メア驚いたんだよね？ 君がイキナリ手え離しちゃうからあ…。
心臓止まっちゃうかと思った」

心臓止まりそうだったのはこっちの方だよ馬鹿
だが、敢て口には出すまい、と心に誓ったアレンだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1214f/>

神の使徒と魔女と...

2010年10月10日05時00分発行